

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530821

研究課題名（和文） 近世後期の旅に関する教育史研究—西日本の旅日記を素材として—

研究課題名（英文） Research on the educational effect of the travel in the late Edo period: Lead the travel diary of western part of Japan

研究代表者

鈴木 理恵（SUZUKI RIE）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80216465

研究成果の概要（和文）：西日本出発の旅日記（伊勢参宮日記および上京日記）を 85 点収集し、その記主・日程・行程などを一覧表にした。それらのなかでも特に詳細な記述の井上頼定上京日記 3 点（広島県山県郡井上家文書）を翻刻した。以上のようにして収集した旅日記を素材として、須磨・宮島・壇ノ浦の三名所に着目して、それぞれの名所化の経緯や学びの場としての機能を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The diaries of travel to Ise Shrine in the western-part-of-Japan have been collected 85 points. Paying attention to three famous places：Suma, Miyajima, and Dannoura, the function as the circumstances of learning of famous place was clarified by using these travel diaries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：日本教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：名所、伊勢参宮、旅日記、須磨、宮島、壇ノ浦、平家物語

1. 研究開始当初の背景

近世後期、各地の名所を巡りながら伊勢に参宮する旅が民衆のあいだに普及したといわれる。なぜ、人びとは旅に出ることができたのだろうか。街道や旅宿などの物理的な諸条件の整備もさることながら、旅を計画し遂行するための知識や教養、計算能力、コミュニケーション能力が民衆のなかに定着していたためと考えられる。ここに旅の教育史研究の意義がある。

旅は、計画段階から帰村後まで旅人に学びを要求したことから、教育史研究の対象とな

るべき課題であるといえよう。すでに、新城常三、深井甚三、高橋敏、瀨本雅史、内田州昭らによって旅の教育的意義やその研究の必要性が指摘されてきた。

高橋は、旅そのものが教育の場であったとして、旅の教育的意義を主張する（「民衆の旅—巡礼供養塔からみた旅の教育・文化史的意義—」『日本民衆教育史研究』未来社、1981年（1978年第一刷））。瀨本雅史は、「ときとして、自己認識を変える契機になるほど、人間形成にとって大きな意味をもったにちがない。見聞体験したことは、細大もらさず、

田舎の人びとに「土産話」として語られる。旅の経験は、持ち帰られた土産物とともに、あらたな知識や情報の伝達と共有の機会にもなった」（『近世社会における教育の多様性』、瀧本・沖田行司編『教育社会史』第四章、山川出版社、2002年、160頁。ほかにも、深井甚三『江戸の旅人たち』吉川弘文館、1997年、57頁。内田州昭「観光文化と生涯学習—観光文化の認識—」、北川宗忠編『観光文化論』ミネルヴァ書房、2004年、207頁）とする。

以上のような指摘にもかかわらず、教育史の観点からの本格的な研究には着手されていない。

従来の旅の研究は、主として交通史や社会経済史、歴史地理学の観点から蓄積されてきた（田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」（『交通史研究』49、2002年。のち、田中智彦論文集刊行会編『聖地を巡る人と道』岩田書院、2004年に収載）、青柳周一「近世旅行史研究の成果と課題」（『歴史評論』642、2003年））。

1980年代以後の旅日記を使用した研究では、旅の範囲やルート、旅人の行動などを類型化する手法がとられてきた（山本光正「旅日記にみる近世の旅について」（『交通史研究』13、1985年、桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」（『駒沢史学』34、1986年、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」（『筑波大学人文地理学研究』XIV、1990年、田中智彦「道中日記にみる金毘羅参詣経路」（『日本宗教文化史研究』1-2、1997年など））。

近年では、旅の効用に触れた研究が注目される。山田浩之は、土産話用の案内記・絵図が近世的知識を提供する役割を担ったことを指摘している（「近世大和の参詣文化—案内記・絵図・案内人を例として—」（『神道宗教』146、1992年）。難波信雄は、民間伝承や芸能に関する民衆の教養と旅の関連を明らかにする興味深い研究を報告している（「道中日記にみる近世奥州民衆の芸能知識と伝承」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』26、1994年）。羽賀祥二は、旧跡を訪れることと歴史認識形成との関連を指摘する（『史蹟論』、名古屋大学出版会、1998年）。青柳周一は観光地域史研究を標榜し、旅人が旅先の地域に与えた影響を追究している（『富嶽旅百景—観光地域史の試み』角川書店、2002年）。八木清治は、旅が人間形成やネットワーク形成に果たす役割を重視した（『旅と交遊の江戸思想』花林書房、2006年）。

本研究は上記のような先行研究の成果に

負いながら、旅に関する教育史研究の可能性を追究するものである。本研究の問題関心は次の3点である。

- ① 人間の旅行目的地の選定はその知識の範囲を超えることはない（内藤嘉昭「海外旅行の現代的意義」（『運輸と経済』64-7、2004）。近世後期の人びとは各地の名所に関する知識を、なにからどのように入手したのだろうか。
- ② 旅とは、既得の知識を現地で確認する作業だといえるが、それだけでなく、旅の最中に名所見物、案内人による説明、名所案内記の記述などによって知識を補充・修正したことは言うまでもない。人は旅から何を学んだのであろうか。また、民衆がこぞって同じ名所を観るといふ現象は、社会にどのような変化をもたらしたであろうか。
- ③ 旅人は土産物や土産話として知識や情報を郷土にもたらし「文化の伝播者」（新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、1971年）であった。旅人の経験は、郷土の人びとにどのような影響を及ぼしたであろうか。

2. 研究の目的

本研究では、主たる史料として、西日本出発の上京・伊勢参詣の旅日記と、安芸国神職井上頼定の5回に及ぶ上京日記を使用し、主たる名所として壇ノ浦・須磨・京都に着目する。そのうえで、上記の①～③の問題関心について、以下のように具体的に検証していく。

- ① 井上頼定の上京日記を分析して、頼定が須磨や京都で見聞きし日記に記述したことがら、頼定の日常生活のどの部分で得たどのような知識や教養に基づいているのかを検証する。これによって、旅がどのような教養文化に支えられたものかが明らかになるだろう。
- ② 西日本出発の上京・伊勢参詣の旅日記のなかの壇ノ浦と須磨に関する記述を分析し、旅人がそこでなにを観て、なにを学んだかを明らかにする。壇ノ浦と須磨に着目するのは、中世以来、芸能を通じて平家物語伝説にまつわる名所が両所に形成されたためである。文学と芸能と名所形成の関係を追いながら、平家物語に関する教養文化の普及と旅の隆盛の関連をみていく。
- ③ 井上頼定の旅の経験が帰郷後に地域の人びとにどのような影響を与えたのかについて検証する。神職に着目するのは、神職が京都と在地の結節的存在であったと

考えられるためである。近世における宗教統制は京都の本所を通じておこなわれたから、神職は必ず京都に赴いて本所から身分認定を受けなければならなかった。近世期を通じて上京した神職数は歴大であり、彼らの経験が郷土に与えた影響は重要であったはずである。

3. 研究の方法

西日本（中国・九州・四国地方）の下記機関に調査におもむき、特に伊勢参詣や上京を目的とした旅日記に限定して収集した。自治体史に翻刻された旅日記はもちろんだが、各地の郷土史研究者などによって翻刻されたものも集めた。原史料については、地方の文書館などに寄託・寄贈されたり、自治体史編集の過程で収集されたりした旅日記を、家文書目録を手掛かりに探した。原史料であれば写真撮影し、翻刻物や写真資料であればコピーした。史料や自治体史などの調査を行ったのは以下の機関である。

・中国地方

広島県立図書館、広島県立文書館、岡山県立図書館、岡山県立記録資料館、山口県文書館、山口県立図書館、島根県立図書館

・四国地方

香川県立文書館、徳島県立文書館、高知市立図書館、愛媛県立図書館

・九州地方

福岡県立図書館、熊本県立図書館、佐賀県立図書館、長崎県立歴史文化博物館、大分県立図書館、大分県立先哲史料館、宮崎県立図書館、宮崎県文書センター、鹿児島県立図書館

・その他

兵庫県立図書館、神戸市立文書館、神戸市立図書館

国立国会図書館、東京都立中央図書館

また、広島県山県郡井上家文書のなかに残された詳細な上京日記を撮影して翻刻した。

研究方法は、収集した旅日記のなかの壇ノ浦・須磨・京都に関する記述を分析し、名所についての旅人の知識が当時のどのような教養文化（文学や芸能など）に支えられたものであるかを明らかにする手法を採用する。その際に名所を学びのメディアとしてとらえる視点から、名所が形成された経緯や、名所における学習効果についても検証する。

4. 研究成果

(1)西日本出発旅日記の収集と一覧表作成

従来の旅の研究は東日本出発の旅日記を史料としておこなわれ、西日本出発の伊勢参宮・上京日記はほとんど利用されてこなかっ

た。そこで、本研究では西日本出発の旅日記の調査をおこなった結果、中国地方出発の旅日記 19 点、四国地方 16 点、九州地方 50 点、合計 85 点を収集することができた。これらの記主・日程・行程を、報告書『近世後期の旅に関する教育史研究—西日本の旅日記を素材として—』（2013 年）に一覧表にして掲載した。

伊勢参宮・上京のルートについては、東日本出発の旅と比較して、瀬戸内海航路を利用するケースが多く、多様なルートを検出できた。

(2)広島県山県郡井上家文書の翻刻

井上家は、安芸国山県郡壬生村において中世以来神職を勤めた家で、江戸期には壬生八幡社を中心に 2 郡 8 村におよぶ祭祀を管掌した。江戸初期より京都吉田家から神道裁許状を得ており、延享 2 年(1745)に定吉が山県郡神職の筆頭注連頭役に任命されてからは代々その役を引き継いだ。

翻刻したのは、井上頼定（1785-1866）が残した上京日記である。頼定の上京日記は、本研究を通じて収集した日記のなかでも詳細さにおいては群を抜いている。頼定の上京は、文化 3 年(1806)、文政 13 年（1830）、天保 13 年(1842)、弘化 5 年(嘉永元年、1848)、嘉永元年の 5 回に及んだ。このうちの文化 3、文政 13、天保 13 の 3 回の上京日記を翻刻し、報告書に掲載した。

文化 3 年の旅は、2 月 22 日に壬生村を出立し、当日中に広島に到着して芸備社家総頭役である白神社野上陸奥守に会い、23 日に本所への献上銀の両替などを済ませ、24 日に広島を出立した。陸路で下瀬野、西条、田万里村を経て、25 日に三原城を見学したのち乗船した。30 日に赤穂に着くまでに尾道・阿伏兔・鞆ノ津・直島などに留船して社寺参詣した。赤穂からは陸路で、姫路・明石・須磨・兵庫・西宮などを経て 3 月 5 日に大坂にたどり着いた。大坂で為替銀を入手して京都に向う予定だったが、銀の抵当になるはずの鉄荷が広島から未到着であったため、予定を変更して、堺・高野山・吉野・多武峰・奈良などを経て 3 月 15 日に伊勢に達し、参詣後同 20 日に京都に到着した。京都に 4 月 25 日まで滞在し、吉田家の執奏にて従五位下薩摩守の官位勅許を受けた。帰路は四国に渡り金毘羅参詣を済ませたのち、5 月 9 日に帰宅した。

文政 13 年上京の目的は、頼定が宗源行事の相伝を受けることであった。5 月 24 日に壬生村を出発して 8 月 9 日に帰宅したので、留守期間はおよそ 2 か月半に及んだ。6 月 8 日に京都に到着し、10 日に吉田良芳に対面した。17 日から 7 月 8 日まで宗源加行を勤め、加行終了後も鈴鹿大和守に指南を願い出て、

稽古本を借りて筆写し、23日まで稽古を続けた。24日に家老鈴鹿筑前守から御墨付物、次第本などを渡されたので、同日に吉田を出立した。

天保13年の上京は、息男頼寿の神道裁許状と官位勅許を得ること、および初重・宗源行事の相伝を受けることを目的とするもので、2か月半に及んだ。3月19日に壬生村を出立し、尾道・讃岐・備前・赤穂・姫路・明石・須磨などの名所に寄りながら、4月8日夕刻に京都に到着した。翌9日に吉田家取次役に願い出て、12日に吉田家当主（良芳）への「御目見」、14・15日に官位勅許（従五位下伊予守）がかない、18日に「御礼参内」をおこなった。頼寿は、初重・宗源の両行事の相伝を5月5日までに済ませ、翌6日に頼定と父子で伊勢参詣に出立した。参宮を果たしたのは奈良や宇治の名所・神社仏閣を巡って、15日に帰京した。さらに洛中洛外の名所や神社を廻ったのち、同月24日に吉田を出立した。大坂へ下り、難波・堺の名所や神社を巡拝し、6月1日夜に乗船し、同5日早朝に広島本川に帰帆、6日晚に壬生村に帰宅した。この在京期間中は頼定自身に特に用事があったわけではないので、買物や名所参観、国学者との交流などに時間を使うことができた。

(3) 学びの場としての名所

① 須磨

須磨については、「旅の学び—メディアとしての名所—」（『近世近代移行期の地域文化人』塙書房、2012年、第3章）としてまとめた。以下のような結論を得た。

中世以降琵琶法師の語りなどを通じて既知の世界となった『平家物語』一の谷源平合戦伝説は、近世期においても芸能との相乗効果によって、悲哀を帯びた須磨のイメージを、身分や性別、地域を超えて普及させた。須磨は、中世末以降敦盛石塔や青葉の笛などの現場や現物を得てそれらの権威を高めることにより名所化した。17世紀末以降名跡名物は増加、詳細化し、近世後期の旅の盛行に伴って多くの旅人を呼び寄せた。

名所は旅人に対してメディアとして機能した。旅人は、名跡名物の数々を現地で見学して名所に関する予備知識を確認し、案内人や道中記の説明によって知識を補充することができた。近世の旅は一本の線を描きながら、その線上にある名所を巡り歩くものであったから、旅は定型化され、人びとの感性を一定方向へと収斂することを促した。つまり、旅の盛行は、名所＝「伝説が、芸能化されあるいは具体的な場や物を得たことで、悲哀に

満ちた『歴史的事実』として記憶され反復再生される拠り所」を訪れる機会を民衆に拡大したといえる。そうした旅人たちが旅日記や土産話として各地にその記憶や感性を持ち帰り、次の旅に活かされて同じような旅が再生産されることになったと考えられる。

② 宮島

宮島については、「近世旅人のみた宮島」として報告書に掲載した。以下のような結論を得た。

信仰の島として知られつつも、名所としては出遅れていた宮島であったが、広島からの遊郭移転、宿坊から宿屋への宿泊先の変化、案内人の存在などの現象から、すでに近世初期において信仰の島から歓楽や観光の島への変化の端緒がうかがえる。17世紀には厳島図が名所図の中心的位置を占めるほどまでに、宮島が名所として認知されるようになった。元禄頃までには芝居や人形浄瑠璃もおこなわれるようになったものとみられる。1800年前後には旅人のための名物や土産物が売られるようになっていたことが明らかである。ただし、全国的にみると東日本からの集客力は弱く、特に東北地方からの来島例は19世紀に入ってから極めて少なかった。

鈴木章生は、江戸周辺寺社の名所としての魅力を、立地・宗教・歴史・世俗の4要素にまとめている（『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館、2001年、223頁）。これに従って、厳島の名所化について整理すると、まず、瀬戸内の海上交通の面からアクセスしやすい立地条件にあったことや、海上の守護神として尊崇され、弥山の山岳信仰があったことなどは言うまでもない。歴史的要素に関しては、他の名所に出遅れていた。厳島は歌枕の地でもなく、平家物語の舞台として描かれたとはいえず、源義経や平敦盛といったヒーローが存在したわけではない。それでも旅日記には、平清盛、豊臣秀吉、弘法大師、小野道風、加藤清正、後藤又兵衛、弁慶などの名が現れる。こうした歴史的人物に関連させて由緒や伝説が形成されていたことがうかがえる。厳島を描いた名所図についても、知念理によって17世紀半ば以降の屏風・襖52点が確認されており（「〔厳島図障屏画一覽〕補遺」『広島県立美術館研究紀要』8、2005年）、当時名所として浸透していたことを示している。

世俗的要素については、すでに寛永5年（1628）に宿や案内人が存在していたことが良恕法親王「厳島参詣道記」からうかがえた。広島城下から遊郭が移転された時期と一致しており、旅人を受け入れる態勢が整えられていたことをうかがわせる。元禄頃までには

芝居が行われるようになったことが知念や田島達也によって指摘されている（「名所なごころ（十）巖島一遅咲きの名所？」『茶道雑誌』63-10、1999年）。18世紀末から19世紀初めにかけて、巖島絵図、楊枝、力餅など、旅人のための名物や土産物が売られるようになったと考えられる。

以上のように、遅くとも19世紀初めには名所としての必要条件が整い、近隣諸国から多くの人びとを集め、東日本からの旅人も呼び寄せるようになった。安芸国内や近隣諸国から島を訪れる人びとは、市立て期間中の芝居見物などや管絃祭の歓楽を求めて、あるいは石風呂や島廻りを目的とした長期滞在型の旅が特徴的であった。遠隔地からの旅人にとって巖島は、あくまでも伊勢参詣への中継地点（あるいは延長旅行先）に過ぎず、神社参拝や弥山登山を済ませると、半日から1日で島を去る場合が一般的であった。

③壇ノ浦

壇ノ浦については「近世後期の旅の学び—阿弥陀寺と壇ノ浦合戦—」として、『教育学研究紀要』（CD-ROM版）58（2012年）および報告書に掲載した。以下のような結論を得た。

安徳天皇の怨霊鎮撫を目的として創建された阿弥陀寺は、中世においてすでに安徳天皇像や平家一門肖像を備え、16世紀末から秀吉を初めとする来訪者の短冊を蓄積し、17世紀末に名所としての形を整え始め、遅くとも18世紀半ばには名所として確立していた。近世後期には、安徳天皇縁起絵による絵解きがおこなわれ、略縁起が板行された。絵解きは、もともと壇ノ浦合戦の場面を大きく描いていた安徳天皇縁起絵を詞章によって敷衍し、寺宝（安徳天皇の劔や能登守太刀）の存在と結びつけることによって、壇ノ浦合戦時代から近世後期現在へと時を超えて安徳天皇を祀る阿弥陀寺の存在意義を強く打ち出し、名所としてアピールするものであった。参詣者は、絵解きを聞くのみならず、略縁起を読み、あるいはそれをもとに紀行文を書いたことから、阿弥陀寺についての均一的な知識を定着させることにつながったと考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

鈴木理恵「近世後期の旅の学び—阿弥陀寺と壇ノ浦合戦—」『教育学研究紀要』（CD-ROM版）58、査読無、2012年、pp. 333-338

〔学会発表〕（計1件）

鈴木理恵「近世後期の旅の学び—阿弥陀寺と壇ノ浦合戦—」、中国四国教育学会第64回大会、2011年11月11日、山口大学

〔図書〕（計1件）

鈴木理恵、塙書房、『近世近代移行期の地域文化人』、2012年、517頁

〔その他〕

鈴木理恵『近世後期の旅に関する教育史研究—西日本の旅日記を素材として—』（研究成果報告書）、2013年、117頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 理恵 (SUZUKI RIE)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80216465

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：